The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クリストファー・ドレッサーにおけるデザイン原理の生成と展開
Author(s)	竹内, 有子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49398
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【44】

氏　　名	竹　内　有　子（たけ うち ゆう こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２６２５　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	クリストファー・ドレッサーにおけるデザイン原理の生成と展開
論文審査委員	（主査） 教　授　藤田　治彦 （副査） 教　授　上倉　庸敬　　教　授　内田　次信

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、19世紀後半にイギリスを中心に活動した産業デザイナー、クリストファー・ドレッサー（Christopher Dresser, 1834-1904）が、自己のデザインの諸原理をいかにしてつくりあげ、それをどのように展開させていったかについて、1850年代から1880年代にかけて、植物学者・デザイン教育者・日本礼賛者として著した著述を検討することによって、明らかにしようとするものである。

ドレッサーに関しては、従来、20世紀の機能主義に通じる合目的的造形や、それに関わる彼の言説に注意が払われてきた。先行研究の多くは、ドレッサーが手掛けた製品の外観、とりわけ1870年代後半から80年代にかけての装飾を排した立体製品に注目し、それらが近代デザインの成立にいかな

る貢献をしたのかという視座から記述してきた。本研究は、このような近代デザインを軸にドレッサーのデザイン活動を一方向的に捉える視点に批判的検討を加えている。その根拠としては、第一に、ドレッサーにとっての装飾は、形態と同じくらいに重要な造形要素として、意味をもち続けたこと。第二に、彼は 1860 年代初期から、製品の形態（構築）を装飾よりも先に検討すべきだと主張し、早くも 1873 年には、「デザイン」という言葉の意味する内容を公表していたこと、を挙げている。

第一章では、ゲーテの形態学のドレッサーへの影響の可能性について検討がなされている。第二章では、ドレッサーが自己のデザイン観を形成する過程が著述内容の変遷に基づいて示されている。第三章では、「アート」と「デザイン」をキーワードに、ドレッサーの「装飾」から「デザイン」への思想的展開を、用語の解釈とともに確認している。第四章では、ドレッサーとジョン・ラスキンの芸術観に関する比較ののちに、アーツ・アンド・クラフツ運動とドレッサーの接点について検討している。

ドレッサーは、植物学研究期に植物の生命力と形成原理について探究し、デザインに道を定めると、その研究から学んだ内容を作品に置き換え、植物の曲線、適合性、シンメトリー、秩序、配列、反復性、交互性などを作品に応用した。そして、自己のデザイン原理を確立するに従って、デザインを構築性と抽象的装飾の結合とみなし、装飾における表現性が重視されるに至る、と考察されている。

以上の考察を通じて、本論は「科学主義に傾注する先駆的モダニスト」というドレッサーの従来のイメージは実像ではないと主張している。ドレッサーの言説には、古典的なものと近代的なものとのあいだの振幅があり、ドレッサーにおいては、普遍性を求める心と多様性を求める心が、いわば両極をなし、相矛盾するのではなく、一つの磁場を形成していた、と結論している。

論文審査の結果の要旨

クリストファー・ドレッサーは官立デザイン学校に学んだ人物であり、文官ヘンリー・コールのグループの影響下にあるデザイナーとして位置づけられてきた。そのために、官主導のデザイン改良運動と、それに対する民間側のラスキンやモリスたちのアーツ・アンド・クラフツ運動という、いわば定式化されたイギリス・デザイン史の相対的構図のなかにドレッサーのデザイン活動がはめ込まれ、その理解は限定的なものにとどまっていた。それに対して本論は、従来のように機械生産を容認したか否かという視点や、初めてドレッサーに注目した研究者、ニコラウス・ペヴスナーが線引きをしたような近代運動への貢献という観点によって、対立的にのみ理解されるべきではないとする。

本論の特徴は、ドレッサーのデザイン観はもとより、装飾観についても見直しを図ったことにある。これまでも、ドレッサーへのゲーテの形態論の影響の可能性や、リチャード・レッドグレイヴ、オーウェン・ジョーンズ、ゴットフリート・ゼンパーといった官立デザイン学校関係者との関係、ラスキンの装飾論との関係等、論及はされてきたが、実際、欧米の研究者によっても徹底的に比較検討されてきたとはいえない。

このようなドレッサー研究の状況のなか、欧米においてさえ十分な比較検討がなされていなかった数々の関係史料に、日本において詳細な分析と考察を加えた点は、高く評価される。一部、用語の解釈と使用に不統一が見られるなどいくつかの問題は残っているが、それを再検討した上で、英文での研究発表も待たれる内容の論文である。以上のような理由から、本論文は、博士（文学）の学位にふさわしい学術的価値を有するものと認定する。